

【小説】輪唱ラヴソング

曾良圭

1

そんなわけで思いきって告白したけどあつさりふられた。それはいい。予想してたから。問題なのはその理由。「今は恋愛とかそういう気分じゃないんだよね」と横田は言った。

なんだそれ。十五の女子の言う台詞じゃないだろ。もしかして、気を使ってるのか？

他に好きな人がいる、なんて正直に言ったら傷つくと思ったのか？ でも、そんなこと知ってる。今さら言われたところで傷ついたりしない。それでも、かすかな期待を抱いて告白する決心をしたのは、横田がいつまでたってもはつきりしないからだった。

「烏龍茶ちょうだい」俺は投げやりな気分横田が手にしている缶に手を伸ばした。「いいよ」「間接キス」「げ」「なめてやる」「それ、もういらなから」横田はあつさり言う。俺は虚しくなつてため息をついた。「女にふられたくらいで、あんまり落ち込むなつて」「おまえが言

に俺を見る。当然だ。今までそんなサービスをしたことはなかったのだから。

「実はちよつと話がある」そう言うのと、横田は「なるほど」と言つてうなずいた。「じゃあ、烏龍茶」

俺は小銭を入れ、烏龍茶と自分で飲むための缶コーヒーを買った。誰にも邪魔されなくなつたので新校舎一階の空き教室に誘うと、横田は文句も言わずについてきた。

引き戸を開け、教室に入る。真っ白な陽射しが校庭を照りつけていた。室内はひどく薄暗い。教室の隅には使われていない机と椅子が積みあげられていた。埃まじりの湿った空気のおいがする。俺は窓を開け放つて深呼吸した。なま暖かい風が汗ばんだ肌をなでた。振り返ると、横田は教壇の上に立ち、物珍しげに何も書かれていない黒板を眺めていた。

俺は横田に声をかけた。あれこれ悩んだけれど、結局、シンプルに「好きだ。つきあつてほしい」と言うことに決めていた。あらかじめ用意しておいた言葉をそのまま口にする。

「ごめん」と横田は即座に言った。「今は恋愛とかそういう気分じゃないんだよね」

その枯れ果てたような言葉は文字通りの意味ではなく

うな」「のどかわいた。やつぱり返して」「間接キス？」「三秒ルールって知ってる？」「なにげにかなりひどいこと言つてないか」

教壇に並んで腰掛け、俺と横田はくだらないことを喋り続ける。こういうのも悪くない。不満なわけじゃない。うそつけ。

授業が終わるタイミングで教室の前で横田が出てくるのを待ち構え、偶然通りかかったような素振りで見声をかける。

「今日は部室に顔出す？」「行くよ」「じゃあ、一緒に行こう」

部室があるのは、築十七年以上経過している（つまり、俺たちが生まれるより前に建てられた！）にもかかわらず、いまだに新校舎と呼ばれている別棟。渡り廊下の手前にある自動販売機の前で、「何か飲む？ おごるけど」とポケットから財布を取り出した。横田は不審そう

で、俺を相手に恋愛する気分ではない、という意味だということを俺は知っている。坂本晃。二年生の先輩。そもそも、俺と横田が言葉をかわすことになつたきっかけは坂本の存在にあった。

購買で昼飯のパンと牛乳を買つて教室に戻る途中、購買に向かう坂本に出くわした。授業が延びて出遅れた、と坂本は苦笑して言い、悪い、急ぐから、と言つて走り去った。すでにめばしいパンは売り切れているだろうけど、それでも急いでしまふ気持ちはよくわかる。坂本の健闘を祈りつつその後姿を見送り、教室に戻ろうと踵を返したところで横田に呼び止められた（正確にはそのときはまだ名前を知らなかった。でも、顔はよく知っていた）。

「こんにちは。はじめまして」と横田は言い、自分のクラスと名前を告げた。どうも、と俺は曖昧な言葉を返しつつ、マキタトモカという名前を頭の中で反芻した（横田朋佳という字を知るのは、もう少し先になる）。

「突然、ごめんね。ちよつと教えてほしいことがあるんだけど」と横田は言った。

俺は表面上は平静を取り繕っていたものの、横田とは

クラスも違うし他に接点もなく、一方的に自分が知っているだけだと思っていたので、突然声をかけられて動揺していた。なにしろ、どうやって話しかければいいのかとずっと頭を悩ませていたのだ。妄想が現実となったような状況に、喜ぶよりも先に猜疑心がわきおこった。これは何かの罠かもしれない。

槇田はそんな俺の動揺をよそに用件を切り出した。

「さっき話してた眼鏡かけた人って、知り合いなの？」

俺は縁なし眼鏡をかけた坂本の顔を思い浮かべながらうなずき、部活動の先輩だと説明した。口に出してから、あ、しまった、と思った。槇田からは予想どおり何部なのかという質問が返ってきた。俺はできれば答えたくなかったで何とか適当にごまかす方法を考えようとしたが、すぐにあきらめた。

「……漫画研究部」

「へえ、漫画研究部なんだ」

悪いか？

「やっぱり、みんな絵が描けるんだよね？」

「そりゃあ、まあ」

世の中には漫画を描かないでもいい「漫画研究部」も存在するのかもしれないけど、少なくとも、俺の所属している漫画研究部では漫画を描くことが義務になっている。

部員が少ないのは、そのせいかもしれない。

「絵が描けないと入部できないのかな？」

自分に権限があるわけでもないのに、「下手でも描く気があればいいんじゃない」と俺は答えた。

「私、入部したいんだけど」

え。随分と唐突な申し出だった。いったい、どういうつもりなんだろう？

でも、もし槇田が漫画研究部に入れば、必然的に週に何回かは部室で顔をあわせることになる。今日のような突発的なものではなく、とりあえず日常的な接点ができる。それは俺にとって、かなり大きなメリットだった。

「大歓迎」と俺は言った。

なにしろ、ただでさえ部員が少ないのだ。先輩たちも、歓迎こそすれ文句を言うはずがない。そう決めつけて、槇田の気が変わらないうちにと、強引に今日の放課後に一緒に部室に行くということで話をまとめた。

「あとで教室まで迎えに行くから」そう言っただけで立ち去ろうとすると、槇田はあわてたように俺を呼び止めた。

「肝心なこと聞き忘れてた」やけに早口で言う。「先輩の名前、教えてもらえない？」

ようやく、俺は槇田の意図を察した。

我ながらかなり鈍い。

槇田もそれを黙認してくれるはずだという根拠のない確信があった。

「そろそろ行こうか」

俺は教壇から腰をあげて、制服についた埃を払い落とした。空気を入れ替えるために開けた窓の戸締まりをして振り返ると、さつきと同じように槇田は教壇の上に立ち、何も書かれていない黒板を眺めていた。

「何か見える？」

槇田の横に並んで黒板を見た。チョークで書かれた線の跡がうつすらと残っているが、何が書かれていたのはわからなかった。

「これ、顔に見えない？」

槇田は、ここが目、ここが鼻、ここが口、と指で示した。言われてみると、確かに顔のように見える。心霊写真のようにぼんやりとした濃淡が顔に見えるのではなく、漫画的な、線で表現された髪の毛の長い女性の顔に見えた。おそらく、それぞれまったく別に書かれた文字や線や円の組み合わせが、たまたま顔のように見える配置で残っていたのだろう。

俺は槇田の横顔を盗み見た。ちょうど槇田がこちらを向いて、目があった。「なに？」と槇田は小さく首をかしげた。俺は短いチョークを手にとった。

坂本晃、と俺は坂本のフルネームを答えた。槇田はうなずきながら復唱して、「ありがとう」と笑った。「じゃあ、またあとで」さつきと立ち去ろうとするのを、今度は俺が呼び止めた。

「俺は今泉」つくり笑いを浮かべる。「今後とも、よろしく」

興味ないかもしれないけど、という皮肉はさすがに卑屈すぎると思っ言わなかった。

槇田が消極的なのか積極的なのか、俺にはよくわからなかった。槇田が入部してからすでに二カ月が経過しているけれど、少なくとも俺の目からは槇田と坂本は同じ部の先輩と後輩という関係から何の進展もないように見えた。自分の思い違いだったのではないかとという楽観的な予測に、俺は「友達」から「片思いの男」へと自分の役割を切り替えることにした。自分自身に課した役割に忠実であることが余計なことに頭を悩ませずに生きるための秘訣だから、俺は「片思いの男」としてもっともふさわしいと思われる行動をとった。結果としてふられてしまったわけだけど、今の俺がすべきなのは「片思いの男」という役割を捨てて再び「友達」に戻ることであった。

「ちょっと見てて」

黒板に残っていた線の跡を無視して、大きく曲線を描いた。顔の輪郭だ。その下に、首から肩にかけての線。そして、輪郭の内側に、目と眉毛、鼻、口。最後に、肩にかかるくらいの髪を描く。俺が人物の描き分けを意識せずに手癖で描いたときの標準的な女の子の顔だった。比較的、絵柄が安定して顔つきがぶれないので、俺の描くヒロインはだいたい同じ顔なのだ。当然、榎田もそれを知っているはずだった。

「似てない？」と俺は言った。

「誰に？」

「榎田に」

「似てないよ」榎田は首をふった。

そんなことはない。そっくりじゃないか。

榎田の姿をはじめて目にしたのは入学式で、背の高い女の子だと思って目をひかれた。どこかで見たことがある顔だ、と思い、記憶を探ってみたけれど思い当たらなかった。次に見かけたのはその翌日で、廊下ですれ違った。見られていることに気づかれないよう、でも、しっかりと記憶に残そうと榎田の顔を盗み見た。どこかで見

だというわけではないだろう。同じように、ヒロインとして特定のタイプの女の子を描くからといって、それがイコール描き手の好みのタイプとは限らない。絵として描くことが好きということと、現実的な好みは別問題なのだ。

とはいえ、描かれた人物に描き手の現実的な好みではないにしろ何らかの美意識や好みが反映されていることは間違いないし、描き手によっては現実的な好みと一致する場合だってある。それまではつきりと意識したことはなかったけど、自分がそうだったのだとはじめて知った。

頭のなかに存在する理想の女の子の姿が具現化した存在、それが榎田だった。

だけど、そんなことを本人に向かって言う気などなかった。そんなことを言われたら、誰だってひくに決まっている。俺はすぐに黒板消しをつかんで絵を消した。「ごめん、今の忘れて」恥ずかしくて榎田の顔を見ることができず、何度も念入りに黒板消しで黒板をこすった。痛い。痛すぎる。

榎田は内心、失笑していることだろう。ほら、押し殺

たことがあるという確信はいつそう強くなった。帰宅してから、自分の部屋の机に向かってスケッチブックを広げた。使い慣れたシャープペンを手に、記憶のなかの榎田の顔を紙のうえに再現しようとした。輪郭。眉毛。目。鼻。唇。髪。消しぐむで描線を消しては何度も描き直した。どうしてもうまく描けなかった。細部の造形が違うような気もするし、その配置のバランスが違うような気もする。疲れて、シャープペンを投げ出した。部屋を出て台所で牛乳を飲んだ。部屋に戻り、描きかけのページを破つてごみ箱に捨てた。気分転換に落書きをしようと思いい、特に誰を描こうというわけでもなく手の動くままに女の子の顔を描いた。手癖で描ける、もつとも自分の絵柄として標準的な女の子の顔だった。髪を描くところで思いつきで榎田の髪形に似せて描いてみた。

似てる、と思った。意識して榎田に似た顔を描こうと思ってもうまく描けなかったのに、何も考えずに手癖で描いた絵は榎田にそっくりだった。どうりで見たことがあると思ったわけだ。

人物の絵が、その描き手の現実的な好みを反映しているわけではないということをもろろん俺は知っている。おじさんを描くことが好きだと公言する描き手は多いけれど、だからといって、必ずしも現実のおじさんが好き

した笑い声が聞こえる。俺は自分の耳を疑って思わず振り返った。

榎田は肩をふるわせて笑っていた。はじめはそれでも笑いを抑えようと口元を両手で覆っていたが、すぐに声をあげて笑いはじめた。笑われても当然だと思っていたけれど、本当に面と向かって笑われるとショックだった。同時に、ちょっとむかついた。それが顔に出ていたのか、「ごめん、ごめん」

榎田は目にはじんだ涙を指で拭いながら言った。

「ねえ、それって坂本センパイに聞いた？」

榎田の言葉の意味がわからず、俺は困惑した。「それ」というのは、俺の書く絵が榎田に似ているということだろうか？ だとしたら、俺の描く絵と榎田が似ているというのは、俺の主観的な思い込みではなく、客観的な事実ということになる。

「今泉の描く絵って、榎田に似てるよな」というようなことを坂本が榎田に言ったとする。坂本は同じことを俺にも言い、それを聞いた俺が、坂本の言葉を真に受けて今回のパフォーマン스에及んだ、と榎田は解釈したのかもしれない。だとしたら、思わず笑ってしまう気持ちもわからなくはない（それでも、むかつくことには変わりないけど）。

でも、違った。横田が言っているのはそういうことではなかった。

「中里に」
「全然、似てない」中里は首をふった。
坂本は、初めて会ったときに誰かに似ていると思ったけど思い出せず、最近になって自分の描いた絵に似ているのだと気づいた、と中里に語った。

「私は咲子センパイに聞いたんだけど」
そう前置きして、横田は話しはじめた。中里咲子は同じ部の二年生だが、もともと頻繁に部室に顔を出すほうではなく、そのうえ何となく近寄りたがたい雰囲気があつて、俺はあまり言葉をかわしたことがなかった。

俺は混乱していた。何かの冗談ではないかと思った。

中里は坂本の日常の言動から自分に対する恋愛感情に気づいていた。だから、坂本に呼び出されたとき、中里は坂本が何のために自分を呼び出したのかわかっていたし、坂本の言葉に対して何と答えるかも決めていた。

「それとも、何か他に元ネタでもあるわけ？」

予想どおり、坂本は自分の好意を中里に伝え、交際を申し込んできた。

それは違う。俺は絶対に誰かのまねなんかしていない。首を振った。言葉が出なかった。

中里はそれをはつきりと断った。

仮に横田の話したことが本当だったとしても、その話を俺がどこかで耳にして忘れていただけなのだととしても、俺の描く絵と横田がそっくりだということは動かせない事実だ。だから、俺にとって横田が特別であることには変わらない。

すると、坂本は何を思ったのかチョークを手に取り、黒板に絵を描きはじめた。坂本の描く漫画に登場する女の子の顔だった。

そのはずだった。

「似てない？」と坂本は言った。

「誰に？」

2

亮ちゃんが死んだのは三年前の三月のことだった。亮ちゃん私のママのお姉さんの長男で、つまり、私にとっては従兄にあたる。当時、私は小学六年生で、亮ちゃんは大学一年生だった。

中学の進学祝いに初めて自分用のパソコンを買ってもらうことになった。でも、パパもママもパソコンにはあまり詳しくなかったから、ママが亮ちゃんにお願いして私と一緒に買いに行ってもらうことになった。小学校の卒業式が終わって最初の土曜日に、新宿に行く約束をした。

世の中には取り返しのつかないことがある。
その晩、私は母親に「ちゃんと自分で亮ちゃんに謝りなさい」と言われて家から亮ちゃんに電話をかけた。
「ごめんね、亮ちゃん。その日、私、デートに誘われちゃったんだ」
「まじかよー。俺なんて彼女いない歴十九年だぜ。もてる女はたいへんだな」
彼女のいない亮ちゃんは土曜日の翌日の日曜日も暇だったので、パソコンを買いに行くのは日曜日に変更してもらった。

卒業式の日、私は生まれてはじめて男子に告白された。六年生では違うクラスだったけど、五年生のときは同じクラスで、隣の席になったこともあった。走るのが速くて、すごく痩せていて、私よりも背が高く、成績もよかったけど、無口で、ちょっと暗い感じのする男の子だった。席が隣だったときもほとんど喋った記憶がない。でも、五年生のときに同じクラスの友達とクラスの男子で誰が一番かっこいいかという話題になったときに、私は迷わずその男の子の名前をあげた（なぜか誰からも同意は得られなかったけど）。

でも、亮ちゃんは土曜日に原チャリでTSUTAYAにビデオを借りに行つた帰りに交差点で信号無視の軽トラックと接触して転倒して死んでしまう。
デートは楽しかった。私はその男の子につきあつてもいいかな、という気になっていた。でも、はつきりとし

た意思表示はせず、また誘ってね、とだけ言って駅前で別れ、夕食に間に合う時間に帰宅した。

家にはパパしかいなかった。ママは亮ちゃんの事故の知らせを受けて伯母さんの家に行っていたのだ。私はパパから亮ちゃんの死を知らされた。

亮ちゃんの死の責任が私にあると考えるのは間違っているかもしれない。でも、私がデートの誘いを受けずに約束通り二人で新宿に行っていたれば、亮ちゃんが原チャリでTSUTAYAに行くことはなく、交差点で信号無視の軽トラックと接触して転倒して死んでしまうこともなかったのだ。私にその結果を予測することは不可能だったから私に責任はないという理屈は正しい。でも、私には私が私を責めることを止めることができない。そして、理不尽だとわかつてはいたけれど、私をデートに誘った男の子のことも許すことができなかった。後日、家に電話をかけてきたその男の子に、あんたとは二度と会いたくないと私は言った。

同じ間違いは決して繰り返さない。

私は誓った。

ああ、良かった。まず、そう思った。あれは夢だった

逃げ出して、一人でお昼ごはんを食べられる場所を探して校内をさまよった。校庭の片隅や、屋上や、新校舎の空き教室でパンをかじった。教室に戻るのは、いつも昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴る直前だった。

パンと紙パックの烏龍茶を買って、今日はどこで食べようと考えながら歩いていた。廊下で立ち話をしている二人の男子生徒の横を通り抜け、あれ？と足を止めた。亮ちゃんがいる。

ああ、良かった。まず、私はそう思った。

でも、この人は亮ちゃんじゃない。そっくりなだけ。顔つきも髪型も縁なしの眼鏡も背恰好も、すべてが似ているけど、別人なのだ。亮ちゃんが生き返ったわけじゃない。私は不意に泣きそうになった。瞼を閉じて、両手の人さし指でこめかみを強く押す。涙が出そうなとき、我慢するためのおまじないだった。一、二、三、と深呼吸してゆっくり数える。これで大丈夫。目を開いた。

亮ちゃんのそっくりさんはいなくなっていた。あわてて辺りを見回しても、すでにどこにも姿は見えない。上履きの色から二年生だとわかったけど、クラスは何組なのか、名前は何というのか、何ひとつわからなかった。私は亮ちゃんのそっくりさんと立ち話をしていたもう一人の男子生徒の姿を探した。いた。私と同じ一年生だった。

んだ。もちろん、それは間違っている。私と亮ちゃんの年齢は七つ離れているのだから、同じ時期に高校に在籍できるはずがない。違う。そうじゃない。亮ちゃんはずでに死んでいる。亮ちゃんであるはずがない。

昼休みだった。私は購買でパンを買うために教室を出た。ママはお弁当を作ってくれると言うけれど、教室を出るときは手ぶらでいたかったので、代わりにお昼代をもらっていた。本当はパンよりもお弁当のほうが好きなのだ。でも、一人でお弁当を持って教室を出るところをクラスメイトに見られるのは厭だった。入学式からひと月のあいだ、私はいつも一人でお昼ごはんを食べていた。中学生になって、私はクラスメイトと距離を置くようになった。人づきあいがひどく煩わしくなったのだ。気がつくとも、体育祭や修学旅行のグループ分けでどのグループにも入れず、最後にようやく人数の少ないグループに加えてもらうような存在になっていた。別に構わない。そう思っていた。それでも、中学では給食があつたから、お昼ごはんは席順で自動的に分けられた同じ班のクラスメイトと机を並べて食べていた。

高校に入学して、私は昼休みの教室での居場所を失った。最初の一週間は自分の机でママが作ってくれたお弁当を食べた。すぐに耐えられなくなった。私は教室から

た。手には購買で買ったパンの袋を持っている。これから教室に戻るところなのだろう。私は思い切ってその男子生徒の背中に声をかけた。

怪訝そうに振り返った男子生徒に、私は精一杯の笑顔を見せた。誰かに媚びを売るなんて何年ぶりだろう。別に迷惑そうな雰囲気ではなかったけど、その男子生徒はなぜか私と視線をあわせようとしなかった。ちよつと暗そうな感じだから、初対面の相手と話すのが苦手なのかもしれない。質問にちゃんと答えてくれるといいんだけど、と心配しつつ私は訊ねた。

ラッキーなことに、亮ちゃんのそっくりさんが漫画研究部に所属していることを聞き出せた。同じ部の先輩なのだという。いいことを聞いた。私は絵心なんてまったくなかったけど、「入部したい」と言った。必要なのは、亮ちゃんのそっくりさんに近づいて、その日常生活に入り込むことだった。学年が違う以上、部活動くらいしか思いつく方法はなかった。

亮ちゃんのそっくりさんと知り合いになって、私はどうしようというんだらう。自分でもよくわからなかった。でも、その存在を知ってしまった以上、心穏やかに高校生活を送ることができないことはわかっていた。それなら、少しでも近くにいたほうがいい。同じ間違いは決し

て繰り返さない。

亮ちゃんのそっくりさんの後輩であるその男子生徒に、放課後、漫画研究部の部屋に連れていってもらうことになった。話が早くて助かるけど、必要以上に乗り気なのが気がかりだった。そういえば、小学校の卒業式の日に私を遊園地に誘った男の子に雰囲気似ている気がする。まさか、今日、初めて言葉をかわしただけの私に好意を抱いているなんてことはないよね？ それじゃあ、三年前の繰り返しになってしまう。そう考えて、私はぞつとした。考え過ぎかもしれないけど、必要以上に好意を持たれないように注意しなくては、と思う。

別れ際、亮ちゃんのそっくりさんの名前を聞き忘れていることに気づいてあわてて訊ねた。坂本晃。教えてもらったその名前を口の中で復唱して、形ばかりのお礼を言った。名前はわかった。知り合いになる目処も立った。さあ、今日はどこでお昼ごはんを食べよう。そう考えながら立ち去ろうとしたところで、呼び止められた。亮ちゃんのそっくりさんの後輩であるその男子生徒は、ぎこちなく笑いながら、今泉、と名前を私に告げた。

興味はなかった。下手に愛想よくふるまって、余計な好意を持たれるのも迷惑だった。でも、亮ちゃんのそっくりさんと知り合いになるために漫画研究部に入部した

ら、後輩であるその男子生徒とも頻繁に顔を合わせることになる。それなら、少しでも仲よくなっていたほうが得策かもしれない。そう考え直して、私は愛想よく笑ってみせた。

「こちらこそ、よろしくね」

ごめん、今泉。

初対面のときのことを思い返すと、私は自分に腹が立つ。私は亮ちゃんにそっくりな坂本に近づくことしか頭になかった。自分のことしか考えていなかった。自己中心的で、最低なやつ。

友達づきあいをしてみると、今泉は外見から判断したほど暗い性格ではなかった。クラスでの居場所の確保に失敗した私には友達と呼べるような存在がいなかったから、今泉は高校に入って初めてできた友達だった。

私は昼食を新校舎にある漫画研究部の部屋で食べるようになった。逃げ場所を確保したことで、クラスにいるときの疎外感はいっそう強くなったけど、今さらどうしようもなかった。少なくとも、昼休みに腰を落ち着けられる場所を探して校内をさまよっていたときよりは気が楽だった。

はじめの二週間は一人だった。今泉が部屋に忘れ物

を取りに来て、私が部屋で食事をしていることを知られてしまった。ひどく気まずかった。それ以来、今泉はなんだかんだと理由をつけては部屋で昼食を食べるようになった。同情されていると感じて反発を覚え、自分に対する下心を感じて疎ましくも思った。でも、亮ちゃんにそっくりな坂本が身近にあらわれたことで、私の罪悪感の方向に変化が生じたのか、私はすっかり人恋しくなっていた。決して同じ間違いは繰り返さない。その誓いを守るのなら、何もむきになって人と距離を置く必要もない。そう考えるようになっていた。

放課後、今泉や先輩たちに漫画の描き方を教わった。下手なりに、ペン入れをしてベタを入れてトーンを貼ると、それなりに見栄えのする絵になるのが楽しかった。お話を考えるのもおもしろかった。人間を描くのは苦手だから、擬人化した犬や猫を主人公にした短い漫画を描いてみたら、坂本に「才能あるよ」と褒められた。お世辞だとしても、うれしかった。

今泉とは、帰宅してからもメールのやりとりをしたり電話で話したりするようになった。ただし、あくまでも「友達」としての距離は保たなくてはならなかった。今泉が初対面のときから私に好意を抱いている、という私

の推測は、うぬぼれや勘違いではなさそうだった。本心をいえば、私も悪い気はしなかった。でも、決して同じ間違いを繰り返すわけにはいかない。

私が坂本に恋愛感情を抱いている、と今泉が勘違いしていることに私は気づいた。確かに私の行動を外から見ていると、そう思えるかもしれない。私はその誤解を利用して、今泉が告白なんてしてこないよう牽制した。その一方で「友達」としての今泉を失うことを恐れてもいた。今泉が私と友達づきあいをしているのは、あくまで「恋人候補」だからなのかもしれない。私が坂本をあきらめるときが来るのを待っているだけなのかもしれない。でも、私が亮ちゃんのそっくりさんとしての坂本を「あきらめる」ことは絶対にありえない。

それを知ったら、今泉は私と「友達」であることをやめてしまうだろうか。そう考えると、今泉に「脈なし」だと思われるわけにはいかなかった。距離をとりつつ、わずかでも可能性があると思わせるように振る舞う。

結局、私は自分のことしか考えていない。

ごめん、今泉。

授業が終わり、いつものように誰ともあいさつをか

わざわざに教室を出ると、廊下に今泉がいた。偶然通りかかったようなふりをしているけど、私を待っていたに違いない。「今日は部室に顔を出す?」「行くよ」「じゃあ、一緒に行くこう」自然を装った不自然な会話。緊張した表情。今泉はわかりやすい。

新校舎へと続く廊下の手前にある自動販売機の前で、今泉は足を止めた。「何か飲む? おごるけど」そんなことを言われるのは初めてだった。これも今泉が予定している段取りのひとつなんだろう。私はどうとでも解釈できるように、軽く首を傾げて今泉を見返した。「実はちよつと話がある」そう言つて、今泉は目を伏せた。「なるほど」私はうなずいた。今泉の勇気が挫けないように、間を置かず言葉が続ける。「じゃあ、烏龍茶」

部室だと先輩が来るかもしれないから、新校舎の一階の空き教室に行こう、と言う今泉の言葉にも素直に従う。湿った埃のにおい。今泉は空き教室に入ると、窓を開け放った。あんまり雰囲気のあるところじゃないな、とちよつと不満に思う。別にいいんだけど。

教壇に上がり、何となく黒板に目を向ける。表面に、人の顔のように見える線の跡がうつすらと見えた。もしかして、坂本が中里に告白した場所というのは、この空

になろうと関心はない。私は、坂本の近くにいて見守ることができればそれで充分なのだ。

「ミッシング・リンク」の最新号つてどこだっけ? と中里は長机の上に適当に積み上げられたコミック誌の山をかき分けながら言った。棚じゃないですかね。私は腰を上げて、中里の背後にある灰色のスチール戸棚を開けた。学校の印刷室にある簡易印刷機で刷った「ミッシング・リンク」最新号が棚のひとつに積まれている。そこから一冊を抜き取つて中里に手渡した。

ありがと。あれ、咲子センパイ、もらつてないんですか? ん、もらつてるけど、と言いながら、中里は部誌の最新号のページをめくる。坂本の描いた作品を開き、ちよつとこれ見て、と言つて、女の子の顔がアップで描かれたコマを指で示した。

これ、私に似てると思う?

長いストレートの黒髪。ほっそりした輪郭。垂れ気味のやわらかな目元。ふつくらした唇。パーツの特徴に注目してみれば、似てるといえるかもしれない。そう答えると、中里はあからさまに厭そうな顔する。でも、そつくりというほどじゃないでしょ? 別にそつくりだとは思いませんけど。中里が期待している答えだからというわけではなく、本心から私は答えた。そつくりというの

き教室だったのだろうか。

こないだ、坂本くんに告白されたんだよね、と中里は言った。そのとき部室にいたのは、中里と私だけだった。私は誰もいない部室で、先輩が持つてきて部室に放置している「週刊少年ジャンプ」を読んでいた。部室のドアが細く開いて、中里が顔を出した。あ、咲子センパイ私が声をかけると、中里は少しあわてたようにそれほど広くない室内を見回し、朋佳ちゃん、一人? と訊いた。そうですよ。よかった。どうしたんですか? ちよつとね。はあ。

中里はコミック誌が乱雑に放置された長机の上に学生鞆を投げ出すと、パイプ椅子のひとつに腰掛けた。ごめん、やつぱり、聞いてもらえる? そう前置きして、中里は坂本に告白されたことを私に語った。別にふつたことを引け目に感じる必要はないだろうけど、何となく顔を合わせづらくてね。

そういうものなのか、と私は少し意外に思った。私は中里のことを、ふつた相手とも気兼ねなく友達づきあいができるタイプだと思つていたので。

私が坂本に抱いているのは、決して恋愛感情ではない。だから、坂本が中里に告白したという話を聞いても、別にショックは受けなかった。坂本が異性として誰を好き

は、坂本と亮ちゃんのようなことをいうのだ。

この女の子つて、咲子センパイをモデルにしてるんですか? んー、わたしもよくわかんないんだけどさ。坂本によれば、坂本の描く女の子に偶然にも中里がそつくりなのだという。そこに、坂本は特別な意味(「運命」とか?)を見出し出しているらしい。困っちゃうよね、そんなこと言われても。中里は大袈裟に溜め息をつく。確かに、それはかなり寒いですね。私は中里に同情してうなずいた。坂本と顔を合わせづらい(合わせたくない?)のも理解できる。でも、私は坂本に恋愛感情を抱いているわけではないので幻滅はしない。

中里と坂本は二年生で、すでに一年以上、漫画研究部で同じ部員として過ごしている。なぜ坂本は二年生になるまで告白しなかったのだろう? 私はふと感じた疑問を口にした。

ああ、と中里はなぜか照れくさそうに笑った。わたし、一年のとき、眼鏡かけてたんだよね。髪も今くらいの長さに伸びるまで必ずゴムで結んでたし。なるほど。

中里は腕時計に目を向けると、椅子から立ち上がり、学生鞆を手を取った。その拍子に、学生鞆の角がコミック誌の山にぶつかった。適当に積み上げられていたコ

ミック誌の山は傾き、床に雪崩れ落ちた。

あー、もう、むかつく！

中里は低い声で言い捨てると、床に散乱したミック誌を蹴りつけた。そのうちの一冊が、勢いよく木製タイルの床をすべって私の足にぶつかった。きやつ、と私は思わず声を上げた。

「ごめん！ 痛かった？ 中里はしゃがみ込んで私の足に触れようとする。私はあわてて足を引いた。大丈夫です。全然、痛くなかったですから。本当だった。声を上げたのは、単純にびっくりしたからだ。ごめんね。いえ、気にしないでください。同じやりとりを何度か繰り返した。

中里はしゃがんだまま床に落ちたミック誌を拾い集める。私が手伝おうと手を伸ばすと、あ、大丈夫だから、と顔を上げて制止した。でも、今度、みんなにちゃんと片づけるように言っておいてね。中里は笑顔で言った。はい、と私はうなずく。顔は笑っているけど、中里が怒っていることははっきりとわかった。

雑誌を持つてきて部屋に放置しているのは、男子の先輩たちだった。とはいえ、私もそれを読んでいるのだから、同罪なのだろう。中里が蹴ったミック誌が私の足にぶつかったのは偶然じゃなかったのかもしれない。そ

……でも、どうやって？

簡単なことだった。

初めから、そうすればよかったのだ。

その前に、私にはするべきことが二つあった。ひとつは今泉が私に告白するよう仕向けること。それは思っていたよりずっと簡単だった。

「好きだ。つきあってほしい」今泉は言った。

そして、もうひとつ。私は三年前の「間違い」の埋め合わせをしなくてはならない。

「ごめん」私はできるだけ今泉を傷つけないよう言葉を選ぶ。「今は恋愛とかそういう気分じゃないんだよね」

その言葉は嘘じゃない。本当に「今は恋愛とかそういう気分じゃない」のだ。私が坂本に対して抱いているのは恋愛感情ではない。

でも、今泉は私が嘘をついたと思うんだろうな。

んな疑念が頭をかすめた。

じゃあ、先に帰るね。中里は手を振って部屋を出て行った。私は閉じたドアをしばらく見つめていた。男子の先輩たちが中里を恐れている理由が初めてわかった気がした。床に落ちたミック誌は長机の上にきれいに揃えて積み直されていた。

そういえば、と私は思い出す。あれから、まだ部屋を片づけていない。

「榎田」今泉が緊張した声で私を呼んだ。

私は教壇の上から、開け放った窓を背に立つ今泉に顔を向けた。今泉はやはり私と目を合わせようとしなかった。弱虫、と思う。同時に、ちよつとほつとする。

中里の話を聞いて、私は気づいてしまった。私と亮ちゃんとは親戚だけど、私と坂本は他人なのだ。親戚であれば、誰を好きになろうが誰とつきあおうが誰と結婚しようが、関係は変わらない。でも、坂本の場合は違う。もし中里が坂本の告白を受け入れていたら？ 中里と会うことを優先して坂本が部屋に顔を出さなくなったら？ 中里が坂本と他の女の子が親しくするのを好まなかったら？ そうでなくても、あと二年で坂本は高校を卒業してしまう。私と坂本の関係はあつてなく終わる。

決して同じ間違いは繰り返さない。